

常陸太田市×茨城大学×YWC 学生と考える将来の水道

常陸太田市上下水道部と茨城大学工学部都市システム工学科、横浜ウオーター(YWC)が連携し、同学科の学生約70人を対象に「都市システム工学特別講義」を実施した。講義は10月11日にかけて3回行われ、国や中小企業診断士までが講師となって水道事業をとりまく話題を披露。同市水道関係施設も見学して経営・技術の両面に理解を深めた。11月11日に開かれた第3回で、学生が同年代への広がりを意識した「将来あるべき水道の姿」をとりまとめた。講義はYWCが前年度に続き、国土交通省「水道事業の啓発に向けた調査検討等及びセミナー企画運営業務」を受託した一環。

10月14日には第1回座談会。講師に国土交通省。市町村や都道府県と協力し、政策の検討や補助、災害対応などをメイン業務とする一方、水道管や施設の老朽化が進み、耐震化にも取り組む必要がある中、人口減少の影響(料金回収率の低下、水道料収入の減少、人手不足など)で安全な水の供給が困難に直面していることなどを話した。

同社上下水道部上下水道企画室の永峯知徳室長は、「水」「水道の歴史」「水道のシステムについて講義。水資源の希少性、江戸時代から近代に至るまでの普及率向上・整備拡大の状況、浄水場から各家庭に水道水が届く仕組みなどを解説した。

国土省水管理・国土保全局上下水道企画課の浦葉翔太事務官は、水道啓発の取組みや水道事業が抱えている問題を中心に「いま知りたい水道」に

国交省職員による講義



同社上下水道部上下水道企画室の国本一郎担当部長は「水道事業の課題」について講義。水道管や施設は老朽化が進み、耐震化にも取り組む必要がある中、人口減少の影響(料金回収率の低下、水道料収入の減少、人手不足など)で安全な水の供給が困難に直面していることなどを話した。

10月21日に開かれた第2回では、経営に関する座学と、施設見学の両面で水道事業への理解を一層深めた。座学は茨城県中小企業診断士協会による「企業会計」、横浜ウオーターによる「水道事業経営」、常陸太田市による「同市水道についての3本立て」。



藤田市 市長



藤田教授



高坂さん

茨城県中小企業診断士協会の米永育理事は、企業における会計は共通言語かつ測位システムに当たるものとして役割を伝えつつ、減価償却の概念などを講義。自身もエンジニアだと明かし、工学系の人材でも、数字を理解することが重要かつ武器にもなると語り掛けた。

また国本部長は、さらに公営企業会計および独立採算制のもとで行われる水道事業経営にフィードバックして説明。異なる地域条件を背負う中で、全国共通の水質基準をクリアした水道水を提供する必要があるのであることを踏まえながら、そのために要するコストとして3条件算・4条件算の仕組みを説明した。



浄水場内を見学



学生の成果発表

「将来あるべき水道の姿」「実現のために何をすべきか」「同世代へどう伝えるか」など、各発表に丁寧な感想を伝えていた。

発表後、国本担当部長は実際に水道の現場で採用されている最新技術を概説しつつ、水道への関心を持ち続けてほしいと学生へメッセージを送った。藤田教授は、具体的な提案を交えた発表に至った事例には、基礎基本の学びに加え、現場見学などでイメージを膨らませてもらったことがあると、

水場では浄水処理工程を見学。藤田謙二市長が学生を迎え入れ、「課題解決へ新たな視点からの提案を期待している。ぜひ一緒に働きましょう」と呼ばれた。共通テーマは安全な水道水を想像して

「将来あるべき水道の姿」「実現のために何をすべきか」「同世代へどう伝えるか」など、各発表に丁寧な感想を伝えていた。

発表後、国本担当部長は実際に水道の現場で採用されている最新技術を概説しつつ、水道への関心を持ち続けてほしいと学生へメッセージを送った。藤田教授は、具体的な提案を交えた発表に至った事例には、基礎基本の学びに加え、現場見学などでイメージを膨らませてもらったことがあると、

関係者から多様な話題 地域の水道事業に理解深める

「将来あるべき水道の姿」「実現のために何をすべきか」「同世代へどう伝えるか」など、各発表に丁寧な感想を伝えていた。

発表後、国本担当部長は実際に水道の現場で採用されている最新技術を概説しつつ、水道への関心を持ち続けてほしいと学生へメッセージを送った。藤田教授は、具体的な提案を交えた発表に至った事例には、基礎基本の学びに加え、現場見学などでイメージを膨らませてもらったことがあると、